

プロジェクト名：「人類社会の進化史的基盤研究（1）」
2008年度第5回（通算21回）研究会
日時：2008年11月24日（月） 13時～18時30分
場所：AA研小会議室（302）
内容：全員「成果出版に関する内容の検討と総括」

各論文のタイトル（あいうえお順）

- 足立薫 「霊長類社会学における非構造と構造」
- 伊藤詞子 「メスチンパンジーの挨拶と離合集散社会」
- 内堀基光 「集団は要るか」
- 梅崎昌裕 「現代の人類『集団』についての人類生態学的考察」
- 大村敬一 「社交としての生業-アフォーダンスをアメニティに変換するオー
トポイエーシス・システム」
- 河合香吏 「東アフリカ牧畜諸社会における隣接集団間の敵対関係と共存のあり
か-霊長類社会の共存様式との比較による試論」
- 北村光二 「『集団』現象の進化史的理解」
- 黒田末寿 「霊長類の社会集団と平等原理」*
- 椎野若菜 「ケニア・ルオの居住集団と居住形態の変遷からみるエスニックな『集
団』の形成-近隣アバスの『集団』のあり方と関連して」*
- 杉山祐子 「居住集団としての『村』と『われらベンバ』をつなぐもの-『呪い』
と祖霊を手がかりに」
- 曾我 亨 「人類の進化史的基盤の考えかた：集団という現象にひきよせて」
「集団という現象にひきよせて考える」
- 田中雅一 「集団からネットワークへ」
- 床呂郁哉 「集団形成と暴力：スールー海域世界の事例から」
- 中川尚史 「霊長類における父系社会の進化」
- 船曳健夫 「人間関係の場と構造-集団の成立について」

1. 霊長類社会学における非構造と構造 足立薫（立命館大学非常勤講師）

日本霊長類学のパイオニアの一人である伊谷純一郎は、霊長類社会の進化理論を構想する際に、社会構造の類型化という手法をとった。1970 から 80 年代の彼の著作には、「構造」に着目した理論の展開が多く見られる。それに対して、伊谷は 90 年代以降、「構造」と対をなす、「非構造」についての考察を行うようになる。「非構造」の位置づけは、人類進化の過程における、社会あるいは「集団」の形成に、重要な意味を持つ可能性が指摘されている。

伊谷純一郎による社会構造の進化論は、BSU (basic social unit) を基礎としている。BSU は集団の構成（オトナオス、オトナメスの比）と移籍のパターンで構成されている。「霊長目全体の社会構造を俯瞰し、その全体の把握を試みるために」伊谷が提出するのは、6 つの構造類型とその進化のプロセスである。

それに対して、90 年代以降に言及の増える「非構造」では、たとえばニホンザルの「孤猿」が取り上げられる。ニホンザルはオスがある年齢に達すると、生まれた群れをはなれてハナレザル＝群れ外のソリタリーオスとなる。このソリタリーのオスは、移籍の途上で集団に属さずに行動する。これを「孤猿」と呼んで、ニホンザルの生活の構造的側面である群れ＝集団生活と対比させている。伊谷の取り上げる「非構造」は単独者とは限らない。鳥類に見られる非常に個体数の多い大集団、あるいは、異種の混交した大集団が「非構造」とされる。中でも混群は、霊長類や鳥類でひろく見られる。鳥類では非繁殖期のみ混群が形成されるのに対して、霊長類では一年中、定常的に混群を形成する例が知られている。

伊谷は構造と非構造は、生物の生活の異なる側面を表しており、「それぞれの種社会がもつ固有の構造の彼方に、非構造の世界があり、そこには構造のなかにだけいたのでは見いだすことのできない異次元の、おそらく自由や楽しみと言ってよい世界があるにちがいない」ことを指摘している。そして、この構造の属性を放棄した非構造の中にこそ、社会の変革や進化をもたらす源泉があると予測している。「構造」が適応論的な、通常の生物学で描き出せる世界であるとすれば、「非構造」は損と得、勝つと負けるだけでは割り切れない世界である。孤猿は繁殖成功度の視点からは測ることができず、混群は最適採食戦略や捕食者回避の利得に換算することができない側面を持つ。

今西錦司が提出した「種社会」の概念は、生活形を同じにする個体からなる社会であり、同種の個体がすべて入る。個体が集団的な生活をしているか、単独的な生活をしているかはどちらでもよい。生活形とは、単に形だけをあらわすのではなく、生活の場＝環境と強く結びついた概念であり、生活の場と生活する主体とが結びついたものである。今西の言う生活の場とは、空間的な場所というだけではなく、生き物が生きていく現象を支える様々な環境の要素が含まれる。生きているという現象そのものの中に、主体と環境を不可分のものとして捉えたのが、生活形という概念なのである。

「種社会は構造と非構造をあわせもつ」という伊谷の図式化は、今西の「種社会」の定義と併せて考えれば、普遍的に動物全体にとって重要となる。言語、知能、文化といった要素の有無に関係なく、社会的なるものが生物の生活において本質的な意味をもつ。従来、人類進化を生物学や自然人類学の視点で考察するとき、「構造」のみが対象となり「非構造」の側面はほとんど無視されてきた。「非構造」の論理の中から、新たな生物学による集団現象の進化的理解を目指すことが今後の課題となるだろう。

メスチンパンジーの挨拶と離合集散社会 伊藤詞子（京都大学）

チンパンジーは挨拶をする動物として有名である。その意味や機能についてはさまざまな説があるが、パント・グラントという音声を伴うことが一般的に挨拶と呼ばれる。典型的には、パント・グラントは呼気と吸気をリズムカルに繰り返す喘ぎ声であり、出会いの場面で多く、対面的で一方向的には発せられ、バリエーションは大きく、「アッ」という一回だけの発声の場合もあれば、パンティングから悲鳴やバークと呼ばれる相手に対する非難といった意味合いが示唆されている音声へと移行することもある。また、対面性がくずれている場合や、二個体以上の相手に向けられる場合、双方がおこなう場合などもある。

こうしたバリエーションを含みながらも、チンパンジーのパント・グラントは、劣位者から優位者へむけられる優劣関係の指標として、攻撃の頻度・方向性と合わせてカウントされるのが一般的である。こうした優劣指標の量的分析から描き出されるのは、チンパンジー社会は階層的／直線的順位システムを形成するオトナオスたちを核にしており、メスたちの社会性はオスとは質的に異なるとも言われながらも、オトナメスたちはこのシステムの下位に位置するという社会像である。霊長類一般に見られる優劣にかかわる行動パターンと比べると、パント・グラントには特殊な点がいくつかある。通常劣位者として位置づけられる個体は、抑制的・非積極的な側（例えば、餌を前にした二個体のうち餌をとらずにいる個体や攻撃される個体）であるのに対して、チンパンジーの挨拶では劣位とされる側のほうが積極的に相手に近づき発声することになっている。また、相手を非難する意味合いを持つと考えられるバーク（場合によっては悲鳴も）が、優位者に対して発声されるのも奇妙な点と言えるだろう。チンパンジーの挨拶のこうした奇妙さは、霊長類学に伝統的ともいえる集団を階層的なものとして捉える見方の中にうまく収まりきらない（実際に説明されたことはない）、逆にいえば、そうしたものの見方を再考するための材料を提供してくれるものである。本発表では、こうした問題意識のもと、チンパンジーのメスの個体追跡中に観察された 134 回の出会いのエピソードの分析をおこなった。

まず、すべての出会いのエピソードのうち、出会った個体間でなんらかの社会的交渉が起こったのは 20%だけで、多くの場合何も起きなかった。ただし、自分が止まっている場合には足音などに聞き耳を立ててそちらを注視するなど、出会いがおこる以前から刻々と変化する周囲の社会的状況に敏感であったことから、社会交渉が起きないことは必ずしも相手に対する無関心さから来るものではないと思われる。

実際に交渉が起こった場合、挨拶行動はその 8%ほどなのに対して、たとえばより濃密な社会交渉と考えられる毛づくろいは全体の 16%に及んだ。挨拶が生じた場合、ほとんどの場合挨拶した側がそのまま立ち去った。立ち去らない場合でも、それまでやっていた採食などの行動を継続したり、誰かと遊び始めてしまった我が子を待ってただじっと座っていたりして、挨拶交渉に続いて他の社会交渉が生じやすいわけではなかった。

一方の挨拶される側としては、相手が近づいてくるのに対して、ただだまって対面状態を保つことがほとんどであり、特殊な例ではあるが、体は対面状態を保つものの顔をしわくちゃにしてそむけ、嫌がっているともとれる事例もあった。

挨拶行動がチンパンジー社会の特徴である離合集散性と関わっているということは、これまでも繰り返して指摘されてきたが、実際の出会いの場面と挨拶交渉から見えてきたのは、挨拶が離れていたこと自体で引き起こされるというわけではなく、くっついたり離れたりを繰り返すやり方と関係しており、出会うつもりもなく出会いがおこってしまう「コンテキストのなさ」と深くかかわっているということである。こうした社会的状況を基礎においたチンパンジー社会における出会いの場面で、社会交渉を開始することは、それが必然でないにしても、そして相手が顔見知りであったとしても、それほど簡単なことではないことを示しているように思われる。

また、逆説的ではあるが、挨拶行動にはそうした場面で「関わらない」ことを可能にするという機能的意味があることが示唆される。すなわち、挨拶する側は、挨拶することでそれ以上の社会交渉をしたり、一緒に居続けたりする必要がなくなるのだ。交渉をすると同時に交渉を打ち切ることが可能であるという意味で、挨拶はチンパンジーの社会交渉の中でもかなり特殊な交渉であると考えられる（最も多い交渉である毛づくろいは継続するからこそ毛づくろいという交渉たりうるし、遊びもまた同様）。このことは、協力的ではあるけれど消極的な挨拶される側の態度を理解可能にする。これまで考えられてきたのとは異なり、必ずしも挨拶される側は積極的に挨拶されたいわけではなく、「交渉しない」という逆説的な交渉に対処可能な手が無いとも考えられる（された直後に相手を追いかけて、叩くことはある）。

こうした「関わらない」あるいは「交渉を打ち切る」ような交渉で、人間社会で類似したものとしては、街中でチラシやティッシュを配っている人の前を足早に通り過ぎたり、店の中で近づいてくる店員に気づいて急に場所を変えたり、有名なゴッフマンの例では口笛を吹かれてそっぽを向いたり、といった例があげられる。これらの例ではコンテキストが比較的是っきりしており、相手の働きかけに対する交渉として表れているのに対し、チンパンジーの挨拶の場合には顔見知りの相手との出会いの繰り返しのなかで、相手のアクションがないにもかかわらず積極的におこなわれる点が特徴的と言えるだろう。

以上から、チンパンジーの挨拶交渉が一方向的になりやすいことには、交渉そのものに内在する特質であるという可能性が示唆され、そこに劣位性や優位性が介在しているとは思われなかった。こうした交渉を累積的に数えていった場合に抽出される集団の階層性／構造については、集団全体の構造の問題なのか、その場その場のローカルな出来事の中で構成される構造の問題なのかを、出会い場面を二個体間に分解せずに分析することで検討していく必要があるだろう。

『集団は要るか』 内堀基光（放送大学）

【進化や集団以外のキーワード：表象、想像力、環境、群れ、ネットワーク】

1. できるだけ「社会文化」人類学風の題材にこだわり、議論でもその分野の用語を使い、しかも「進化」との関わりで人間の集団（性）を論ずる。ほとんど綱渡りとなる議論をしようとは思う。
2. 今次の河合研究会で私がこだわってきたのは、「表象」能力の問題であり、また（今村流に言えば）「想像力」の問題である。この二つの能力は、もちろん異なるもので、後者は前者を前提にする。逆ではない。ここに「進化」を語るモメントを求めることにする。やや当たり前すぎるが。
3. とりあえずの出発点として、「みんなで渡ればこわくない」の論理構成のなかで「みんな」とは何かを、上の(2)の枠内で論ずる。信号、道、ダンプという要素、また「渡ること」自体をどう見るかについて。
4. *Man, the Hunted* で論じられていることも同じだと思うが、共に行動する集団にとって「環境」とは何か、を考える。このなかから個体にとって、集団とは何かを考えてみる。
5. 「渡らなければ」みんなにいる必要はないのかどうか。上のような直接的行動集団、つまり「群れ」に対して、表象される集団、想像される集団、表象（想像）されるだけの集団とは、どのようなものか。それを集団と呼んで良い根拠はあるか。
6. ここから集団を離れて個体間ネットワークの議論に進めたいのだが、うまくいくかどうか。表象と想像力を個体におけるノッド（契機）としたネットワークの限界としての集団の外部境界（かな）といったこと。
7. 最後に、(5)、(6)で語られるような「集団」が「群れ」を基礎としているかどうかについての考察。ここでいう「群れ」がいかなるものでありえたかについては深くは触れないこととしても（これは文化人類学の領分からはすこし離れる）、この考察なしには、河合研究会に相応しくなさそうなので。

現代の人類「集団」についての人類生態学的考察 梅崎昌裕（東京大学）

「集団」は、研究分野によっていろいろな意味で使われる。生態学の分野では、集団とは個体群、す

なわち「ある任意の空間に生存するひとつの生物種の全ての個体」を意味する。遺伝学では、集団とは、遺伝子プールを共有する個体の集合、すなわち再生産の単位である。人類の歴史をみれば、生態学的・遺伝学的意味での「集団」が長く機能していたのは間違いない。これは、地球上のさまざまな生態学的条件ごとに遺伝子の変化をとともう適応が成立しているという状況証拠から推測されることである。人類の歴史のなかで、かなり長い期間にわたって、それぞれの「集団」は、かなりホモジニアスな成員で構成されていたはずである。

ところが、およそ1万年前に農耕が始まり、権力と階層が芽生え、国家が成立すると、「集団」は相対的にヘテロジニアスな成員によって構成されるようになり、さらには産業革命を契機として、「集団」の生態学的・遺伝学的意味は急速に消滅しはじめた。流通・通信の発達、大都市の成立は、このような変化に拍車をかけたはずで、今日では人類の「集団」に生態学的・遺伝学的意味をもとめることはあまり意味がない。

それでも、人間がお互いにかかわりながら生きているのは事実であり、自分が仲間だと思う人たちと何かしらの「集団」を構成し、その「集団」はふつう何らかの「社会関係資本 (Social Capital)」を共有している。「社会関係資本」とは、「集団」のなかでの信頼関係・助け合いなどを指し、「集団」の健康状態とが密接に関係することが知られている変数である。重要なことは、グローバリゼーションと環境破壊に直面する21世紀の人間の「集団」が、「社会関係資本」を失いつつあるのかどうか、それはどのような条件によって影響されるか、そして「社会資本」を失うことで生存と健康にどのような影響が及んでいるのか、を明らかにすることである。

この目的のために、著者が現在すすめている、アジア・オセアニアの7000人を対象にした環境・生業・健康のプロジェクトの結果を使う予定である。

キーワード：生態学、環境、生業、健康、社会関係資本

相互行為の過剰を制御する仕組み：カナダ・イヌイトの生業から考える人類の社会形成の進化的基盤 大村敬一（大阪大学）

キーワード：イヌイト、生業、イヌイトの社会＝生態生活の指針、行為の贈与、行為の分かち合い（シェアリング）、アフォーダンス、アメニティ、選択肢の過剰、ダブル・コンティンジェンシー、複雑性の減少、相互行為の型はめ

まだ、まとまっていません。循環論になっているような気がします。論理がうまく回っていないような気がします。コメントをお願いします。

- (1) 目的：人間が集団をつくるために最低限に必要な条件をさぐることで、人類の進化史的基盤を考える。
- (2) 方法：イヌイトの社会＝生態生活の指針 (*Inuit Qaujimagatuqangit*) の理念を分析することで、イヌイトが社会を絶え間なく生成する仕組みを浮き彫りにし、その社会生成の仕組みが作動するために、何が最低限に必要なのかを考える。この際に、これまでの極北人類学の成果を整理して、イヌイトの社会＝生態システムを生成する生業の仕組みを統合的に把握する試みを行うが、新たなデータを使った分析は行わない。
- (3) 前提と出発点：

よくよく考えてみれば、人間が人間であるということは自明のことではない。イヌイトの場合、「人間／非人間」というカテゴリーは生業の実践の結果として事後的に生成する。イヌイトの人間同士の社会的関係と野生動物との生態的關係は、生業（狩猟・漁労・採集からシェアリングまで含む相互行為の連鎖）という身体を使った相互行為の努力を実践することによって循環的に生成されるため、社会的関係と生態的關係は不可分の一体として、あくまでも生業の実践の結果として生成する（←資源人類）。この意味で、イヌイトの集団形成の基礎は、「人間」と「非人間」の絶え間ない循環的な離接的接合を引き起こす生業の実践にあると言える。生業の実践の中で、野生生物との生態的關係が人間同士の社会的関係を基礎づけるとともに、社会的関係が生態的關係を基礎づける。したがって、集団について考えることは集団を結果として生成する生業の過程について考えることであり、集団の生成の問題を考えることは、人間同士の社会的関係だけでなく、野生生物との生態的關係も生成する生業の過程の全体を循環的システムとして考えることである。つまり、集団について理解することは生業の過程を理解することの一部である。

それでは、このような社会的関係と生態的關係を循環的に生成する生業の過程によって何が可能になり、その生業の過程が可能になるために最低限に必要な条件とは何か？

- (4) 見積もり：

(A) 分析：「イヌイトの社会＝生態生活の指針」(IQ) とイヌイトの感情生活の矛盾（「自律の見栄と面子」と「孤独への恐怖」(←Briggsの「理想的パーソナリティ」)) を分析することで、社会＝生態システムを生成して「人間」を生態系の中から「集団」として浮上させる生業システム全体の仕組みをモデル化する。

◎イヌイトの「社会＝生態関係」の理念型

＝循環的に維持される3P関係（人間2人と動物1人）

◎イヌイトの出発点＝「関係の断絶への恐怖」と「予防」

◎生業を実践することによって「行為を贈与し合う」異種間関係と「行為を分かち合う」人間内関係が生成する（循環的な離接的接合）。

◎結果として「人間」の「集団」が異種間関係の中から浮かび上がる。

(B) 考察：集団によってイヌイトが可能になること、集団をイヌイトに可能にすること

◎以上のようなシステムは「現実を解釈する仕組み」ではなく、「アフォーダンスをアメニティに変換する仕組み」として理解することができる。

＝「環境から許容されること」の可能性を限定して組織化することで「快適に住まう環境」（いちいち相手とどのように相互行為したらよいかを考える面倒がない環境であると同時に、一定の相互行為を通して自らと一体化した環境）を生成する。

あるいは、集団を形成するのは、相手との相互行為をいちいち考える面倒を排除するためなのかもしれない（世界の過剰性の縮約＝面倒を減らす）。この結果として、逆に相手との一体感（馴染み）が生成されるのではないか？

◎集団によって可能になること（＝生業の過程が走ることで可能なこと）

＝迷いを減らしてさらに迷いを生成する（相互行為における過剰な選択肢を減らし、相互行為における複雑性を減少させることで、その複雑性が減少したシステムの内部ですらに入れ子状にシステムを生成することができる）。

＝アフォーダンスをアメニティに変換して、さらなるアフォーダンスを生成するための場を生み出す。

◎集団を可能にするために最低限に必要なこと（＝生業の過程が走るために必要なこと）

＝相互行為を型はめして「」に入れてしまうこと（この「」による相互行為の型はめはさまざまなやり方のさまざまな組み合わせで行うことができるだろう：遺伝子、身体図式、身体加工、表象、環境加工と環境改変）。

＝論理階型を多重化する。

（5）暫定的な結論

◎進化の問題を過剰な複雑性の制御を可能にするシステムの問題の歴史として考えることはできないか？ そのシステムにはさまざまな種類の型はめをさまざまなかたちで組み合わせたタイプがありうる。集団形成をめぐるサルから人間への進化の問題は、複雑性を減少させるさまざまなシステムの組み合わせが変換されてゆく歴史の問題として定式化されうるかもしれない。

東アフリカ牧畜諸社会における隣接集団間の敵対関係と共存のありか-霊長類社会の共存様式との比較による試論 河合香吏（AA研）

1. はじめに

- ・目的：「集団」なる現象について、これを行動＝社会の土台となり、舞台となるものととらえ、そうしたいわば「基盤」として、「集団」という概念を考えたい。
- ・「集団」において、人びとが行動する場所、テリトリーの有無あるいはその特殊性
- ・それらはいずれもひとびとの行為／行動によって構造化されるとともに、その当の構造化された集団間関係によって人びとの行為／行動に規制がかかる（行為／行動を決める）ものでもあった（ex. 敵対関係中は行き来できない）。伊谷はこの規制を「規矩」と呼び、また別のところでは「価値体系」と呼んでいる。
- ・集団間関係としてこの地域に特異的であるのは、この関係、すなわち「敵」であるのか「味方」で

あるのが未来永劫の宿命的なものではなく、通時的にみれば、敵と味方という関係が継続的に繰り返されているという点である。両者のあいだには通婚もみられ、また、自集団内における親しい間柄である友人関係と同様の関係が認められる。

- ・ 規矩（価値体系）は個の具体的な行為にたいし、前提として機能している側面がある。
- ・ 敵対関係と非敵対関係とは具体的にどのような行為によって構造化されているのか。
- ・ 「集団」という社会的現象が人びとの生存上に果たす原初的な意味について考える。

2. 東アフリカ牧畜民における隣接集団間関係

2-1 集団間関係をあらわす用語と行為

- ・ 材料としてはドドスとトゥルカナの隣接する2集団の関係をとりあげる。
 - ・ これまで東アフリカ牧畜民における隣接集団は、「敵対関係=antagonism」と「友好関係=friendship」ないし「同盟関係=alliance」といったまったく逆の二相を繰り返すことが指摘されてきた。
- 敵対関係と非敵対関係が繰り返される集団間関係の具体的顕れをとおして、目の前にいる（見えている、存在が確認できる）個々の個体の集まりを越えて、自集団、他集団という抽象的な「集団」概念が形成される原理を考えたい（「いま、ここ」を越える集団の生成、抽象的な他集団）。

2-2 「ヒトはなぜ戦うのか」という問い（の危うさ？）

- ・ 「好戦的な牧畜民」→エチオピア西南部の牧畜民や農牧民の事例
 - ・ 福井さんたちのグループの視点：戦争の起源、暴力の起源として、略奪、襲撃、戦争（内戦）、復讐、皆殺し（女性や子供を含む）、
 - ・ 自分のウシが死んだ悲しさ→隣の農耕民を殺戮。殺人そのものが目的となっている。
 - ・ これらに対して、ドドスやトゥルカナの襲撃や窃盗は家畜の略奪が第一の目的で、目的はそれ以外にない。だが、襲撃の際、副次的に殺人はあるしAK47などの流入により死傷者の数は増えている。
 - ・ 同じ「暴力」であっても、その内容は同じ牧畜民でもずいぶん違うという印象。
- 生存パターンの本質的な違い？原始的トレード（今村先生）？生業活動の一環？
- ・ 全面戦争はまずない→大虐殺をとまなう「民族紛争」にならない。

3. Pan 属2種の集団（BSU）間関係

3-1 敵対・殺戮と融合

3-2 常態としての敵対／競合関係

3-3 平和的共存と敵対的共存

ボノボは遊動域を大きく重複させ、出会ってしまうと群れ間で積極的な相互行為、
→ 融合。いっぽうチンパンジーは避けあい、会ってしまったら敵対的な行為。

4. 共存のかたち

4-1 混群

- ・ 生活形を共有する者同士（同種だけでなく異種他個体）がひとつの「社会」を形成している（足

立) →ドドスとトゥルカナをひっくるめて「社会」と呼ぶことは可能か。

- ・「コミュニティ」の概念（定義、地域集団）

4-2 離合集散

- ・チンパンジーで典型的だが、牧畜民の家畜キャンプも行為、パターン自体は同様。
- ・曖昧なバウンダリーと重複しないテリトリー→境界は「国境」でしか指示できない。
- ・緩衝地の存在（互いに出会わない戦略をとったときにくっきりとわかる）

4-3 許容

- ・許容性、寛容さといった社会性→ともに生きてゆくための「人間性」？
- ・非敵対的と呼んできた関係→「許容」という言い方がいちばん現実に近い言葉かも。
- ・友好と言うほどには積極的に仲良くするわけでもないし、それは個人的な関係であって、実態として集団と集団との間の関係ではない。ましてや同盟とはとても言えない（第三者の必要性）。「許容」の実質的な行為としては「黙認」という言葉がふさわしい？
- ・ドドスがトゥルカナの侵入を許さなかったらトゥルカナの家畜は死んでしまう。トゥルカナだから助ける／助けないという問題ではなく、同じ牧畜民、同じように家畜に強く依存している相手を否定することはできなかった？（トゥルカナへの同情的な発言）

4-4 尊重

- ・牧畜民同士は敵対関係にあっても、たとえばドドスとトゥルカナは「互いに尊重しあっている」というか思えない。それは、自らがウシに生きているのと同じように相手もウシとともに生きているから。

5. おわりに

- ・社会集団は少なくともヒトにとっては、目に見える個体の集まりにとどまらず、表象化によって不在の個体（他者）の存在を認める。われわれ意識の生成⇨彼ら意識の生成？
- ・ドドス-トゥルカナ関係も、通時的に見えれば「敵対関係をも内を含む集団」というより高次の共存のありようとして、長い進化の過程をともにしてきたヒトとヒト以外の霊長類に通底するものであるはず。
- ・牧畜民と高等霊長類が同じだとは言わない。関係のありようはもっと複雑。だが、会えて両者の社会構造をつくる個体の行為・行動の比較をすることによって、これまで私には理解できなかった敵対と非敵対を繰り返す牧畜民の隣接集団間の関係の生成機序について、理解への道が開かれたように思う。
- ・共に生きて行くには「努力」が必要であり、それはやがて「制度」と呼びうるものへ。

「集団」現象の進化史的理解 北村光二（岡山大学）

キーワード：意味カテゴリー、行為カテゴリー、循環的な決定過程、「もの」との関係づけと他者との

関係づけの両立、社会的まとまり、

1. 問題となる「進化」という用語については、どの分野の人も使えるような、できるだけ素朴なニュアンスのものとして使おうと思う。つまり、サル「集団」現象と人間の「集団」現象には、何らかのつながり（共通性）があり、しかも、両者の間の隔たりには、その移行を橋渡しするようないくつかの要因や段階が想定できる、という程度のものにする。

2. 前回の発表では、全面的にルーマンに頼った論理構成になった（その割には、用語が不正確なままであった）ため、人々の理解が得られなかった点を反省して、論文では、可能な限り、ルーマンは表に出さない（システムという言葉も使わない）ことにする。

3. とにかく、サル「集団」現象と人間のそれが同じような理屈で理解可能になることをわかりやすく説明することに、集中する。

4. その際、前回の発表では手をつけることができなかった、サルから人間への移行を橋渡しするような要因や段階を具体的に指摘して、それが少なくともストーリーとしてもっともらいしものになることを目指す。

5. 具体的に今想定している両者の間の違いとは、人間社会の「集団」は、一般的な想定において、「群れ（＝ニホンザルのそのようにメンバーシップが定まったもの）」と同じように、「メンバーシップが何らかの程度で一定している」という性質のものと考えられているが、「群れ」とは異なって、そのメンバーがいつでも空間的に近接しているという条件は必要とされない。そして、これらの条件に対応して、人間の「集団」現象は、「集団」のメンバーの一部ないしは全部が、環境のある部分との関係づけにおいて、あたかも一つの身体であるかのように、ある特定の結果の実現に向けて、「意志的調整の統一体」としての社会的まとまりを作り出したり、対象への働きかけにおける「自律的作動の統一体」としての社会的まとまりを作り出したりするというものになる。そして、これらの「集団」現象とは、基本的には、「もの」との関係づけを適切なものにしようとするのと他者（＝同じ集団のメンバー）との関係づけを適切なものにしようとするのとを両立させようとするときに、対処がより容易な他者との関係づけという側面を取り上げて、行為接続に秩序を作り出そうとしたり、行為選択を一致させようとしたりしながら、それと両立する「もの」と関係づけを選択しようとすることによって生み出されているのであり、その点でそれらは、「群れ」の再生産を可能にしている、行為接続に秩序を作り出そうとすることと、行為選択を一致させようとするということという2種類の活動のそれぞれと共通の性格のものである。

6. これらの両者の隔たりを橋渡しする要因としては、以下のことが考えられる。すなわち、サル「集団」現象では、集団のメンバーがいつでも空間的に近接していることが不可欠だと考えられるこ

とから、群れの再生産を支えている「仲間／それ以外」という他者分類は、同種個体の空間分布における分節的集中が繰り返し再生産されるという条件のものではじめて可能になっていると考えられるのであり、したがってこの他者分類にもとづく「集団」現象の再生産は、上記の2種類の活動が同時に成立しなければならないと考えられるのに対して、人間の集団では、いったん、集団の輪郭が顕在化すれば、表象化能力？の獲得によって、この他者分類が、分節的集中の再生産という条件とは独立にいつでも可能になることから、その時々解決すべき課題に対応して、ないしは、それぞれの集団の傾向性に対応して（これは、今回はあまり述べないつもり、前回の発表でも反感を買った）、どちらか一方のタイプの活動で、サルの場合とは明確に区別できる活動が実行されることになる。そして、この両者の隔たりを橋渡しする段階として、類人猿の「集団」現象があるということになるが、たぶん、今回は、これについて詳しく述べることは、分量的に無理ではないか、と考えている、

黒田原稿構想 黒田末寿（滋賀県立大学）

僕の論文は霊長類を扱いながらも多分に思弁的なものになります。遠くの目標は、人間の「存在の複数性」を霊長類社会学から基礎づけることにありますが、とりあえず、次のことを具体的目標としてかかげます。

1) 霊長類の「集団」は成員の「努力」によって保たれている人工的な構築物であるというとならえ方が可能であることを示すこと。ことに、伊谷の言う平等原則社会は、ある程度は相手を慮り、自己の客観視が可能な霊長類がつくるものであることを再確認し、「独立個体」が対等なままで「集団」を形成するには、「我を忘れる状態」「のっぴきならぬ事態（個が個でなくなる興奮状態）」が必要であることを結論する。

2) 論理の方法としては、

- a. 伊谷平等原則社会論を徹底化すること（したがって伊谷さんの批判を含みます）、
- b. 独立個体同士は基本的に結びつけない（単独性）こと、
- c. それを破るには「のっぴきならぬ事態（個が個でなくなる興奮状態）」が要請されること=チンパンジー属も人間も「興奮動物」であること、つまり興奮によって「源基社会」が出現すること、
- d. 親子関係や生態的要請は、興奮の手段として機能しても、ここでの議論から区別されるべきこと
- e. のっぴきならぬ事態に方向性を与え「集団性」を出現させるもっとも普遍的なやり方に「対敵連帯原則」あるいは「第三項排除」があること、

3) 結語

- a. 平等原則社会は単独性の強い霊長類が創りうる人工物である。平等性は自己・他者の関係性を認識する能力を必要とし、複層的な意識をもつものがこれをつくる。
- b. このような霊長類にとって共在（そばに他個体がいること=集団をなすこと）は、すでに（軽い）興奮である、つまり、興奮とは社会性である。
- c. 「のっぴきならぬ事態」は手段にも目的にもなる。

d. 「社会の進化」とは、興奮と社会性の関係の分化・多様化・エラボレーションとも言えるが、平等動物であるわれわれの根幹は単独性にあり、これ自体は興奮=社会性に回収されきることではない。

「ケニア・ルオ」のできかた—人びとの集団のつくりかた 椎野若菜（AA研）

私が調査研究の対象としてきたケニア・ルオ社会は、単系出自のモデルが構築され適用された、代表的な舞台となったところでもある。エヴァンズ=プリチャードが1930年代後半から調査し分節リネージ体系の理論を導き出したヌエル社会と、同じ言語文化系のケニア・ルオ社会。E-Pの弟子であるサウゾールは1960年代、そしてそのまた弟子のデヴィッド・パーキンが1970年代に都市におけるルオを調査し、単系出自集団、分節リネージの理念をもとにルオ社会の政治システム、祖先・Ramogiを起点とする親族ネットワークのありかたを描きだした。

現在、ケニア・ルオの人びとは父系、そして男系理念にもとづいた居住集団を形成し、ケニア西部のヴィクトリア湖沿岸に暮らしている。オーラルヒストリーによると、人びとはナイル川流域から南下し、ウガンダをとおりヴィクトリア湖を渡って、敵と戦いながらいまの地に落ち着いたという。その、現在人びとが暮らす土地に着いた当時の居住形態やともに暮らしていた人との関係性を聞いていくと、基本的には父系的関係でつながっているのだが、現在では考えられないほど異なる言語系や姻族までを包含する寛容な居住集団を形成していたことがわかった。M. グリックマンの仮説どおりのストーリーである。さらに、植民地期から現代にいたるまでの植民地政府、そして独立後の中央政府の民族集団の名づけのやりかたをみると、それは明らかに政治の動きにともなう変化がみられる。さらにここ数年の大統領選挙をめぐるルオ意識の高まりは、国内だけでなく近年はウェブによるルオのつながりも観察される。

このように本論では、イギリスが植民地化し始めた前後から、現代の「ケニア・ルオ」にいたるまでの集団の形成と意識の変化、そしてその背景を、人類学の学説史と現代の政治との動きの関連でさぐっていきたい。

○東アフリカにおける集団のとらえかた

出自集団、分節リネージ体系

E-Pからサウゾール・・

*近代人類学

○ルオ・ユニオン

都市におけるルオの「集団」の組み方

D. パーキン

*近代人類学の名残

*ルオの先祖、Ramogiとの「つながり」で説明

○ルオの居住集団の形成の変化

姻族も含む居住集団から、父系理念の強化へ

* Glickman, Maurice

○植民地期から現代にいたる「ルオ」意識の形成

Cf.) Aba-suba (1910? 年代)

Luo-abasuba の誕生 (1930? 年代)

現代は suba の独立 (対ルオ) (1990 年代)

ルオイズムの強化 (2007 年以降)

○現代のルオの「集団」

ルオランドからナイロビ、そして世界におけるルオ

ウェブによる「つながり」の意識による集団

Jaluo.com

luo-socialforum.org

居住集団としての「村」と「われらベンバ」をつなぐもの—「呪い」と祖霊を手がかりに

杉山祐子 (弘前大学)

人類進化における「集団」を考えると、集団規模の拡大と多様な生態域への進出は、人間性の発展と密接な結びつきを示す事柄であると思われる。この研究では、アフリカ焼畑農耕民における居住集団のありようと「われら」意識のなりたちを明らかにすることによって、その類型の一つを示し、人類史の枠組みにおける「集団」への議論につなげることを目指している。

その一環としての本報告は、ベンバの村における平準化機構のしくみとそれを支える「呪い」に着目し、居住集団の規模では、狩猟採集民のそれと大差なくみえるベンバの村が、数十万の人口を擁する「われらベンバ」にどのようなつながりあわされるかを検討した。

ベンバは 19 世紀末までに、ザンビア北部州一帯に勢力を拡げ、強大な王国を形成したが、居住集団としての村は小規模で、母系親族を核に構成される。パラマウント・チーフを頂点とする政治機構が整い、王や村長などの政治的権威が維持される反面、村では、食物の分与を中心とする平準化機構が経済的格差を拡大することを抑制している。

ベンバの村は母系親族を核としながらも、常に異質な成員を含む居住集団であり、ある種の揺らぎを組み込んだ構造をもつ。日常的な食物の分与が、女性の活動によって生起し、女性たちが「共にいること」によって、いわば自然に生じているのに対して、男性が関わる酒宴には、「呪い」への恐れとも表裏一体となった、より規範的な「分配」が関わっている。

このような二様の分与と分配の実践は、世帯間の経済的格差を平準化する結果をもたらすが、そのうちの規範的な「分配」を「呪い」という点から吟味すると、平準化に向かう力は、同時に差異化に向かう力でもあることが明らかになる。呪いは、それを発動させる祖霊の霊力を前提としているが、その存在を前提とすることは、ベンバ社会における権力の基盤を容認することと同じだからである。しかし、揺らぎを組み込んだ構造を示す村において、その権力の正当性は常に他者からの承認を必要とする脆弱なものであり、権力が独り歩きすることには、さまざまな側面で、強い歯止めが用意されている。

ベンバの村は、祖霊信仰に支えられた「呪い」と祖霊の系譜の応用によって、親族外の人々も取り込む集団化のしくみを備えている。それによって「われら」意識を共有する人々を、村の日常実践のなかで連結しながら、「分与」を共通の規範とするより大きな規模の社会の構成を可能にしている。このような連結の原理は、ベンバ王国自体にも共通しており、政治組織だけからは、中央集権的な統合を果たしているかにみえるベンバ王国は、集団を構成する原理という点からみると、「相同」であることによって、成り立っているということが出来る。このような王国の様態は近隣の王国にも共通しており、ある類型化が可能である。

人類の進化史的基盤の考えかた：集団という現象にひきよせて 曾我亨（弘前大学）

はじめに

「人類社会の進化史的基盤研究」というが、いったい何を考えたら進化史的に考えたことになるのだろうか？ 人類進化史的に考えるとは、なかなかムズカシイ。実は、わたしも「人類進化論」を掲げる研究室で学んでいながら、進化史的に考えてきた経験はまったくなかった。この研究会には、おそらくこれまで進化について考えることの少なかった哲学者や文化人類学者がふくまれている。彼らの参加は非常に重要で、この研究会に特別の価値をあたえているのは、もともと人類進化について考えてきた霊長類学者や生態人類学者ではなく、彼らである。彼らがこの研究会で一緒に人類進化について考えてくれることは、霊長類学者や生態人類学者への大変な贈り物であるし、彼らにとって人類進化研究に参加するということは、おそらく心理的葛藤すらともなう大変な冒険であるに違いない。この絶好の機会に、わたしとしては「進化史的基盤について考える」とはいかなる行為をさすのか、哲学者や文化人類学者の人びとと共有し、深めていきたいと思う。

実は、京都の人類進化研究は1980年代後半から大きく沈滞してしまった。そのため、霊長類学者と生態人類学者のあいだでも、人類社会の進化を研究するとは、なにをどのように考えることをいうのか、また人類進化について考えることにいかなる価値があるのか、ほとんど議論されてこなかった。そこで以下では、(1)人類進化研究を、伊谷純一郎をはじめとするサル屋とヒト屋がどのように考えてきたのか、(2)そして、それがどのように衰退したのか、(3)衰退のなかで、人類進化研究はどのように命脈を保ったのか、(4)そして今、なにを目指すことができるのか、を順にみていきたい。

1. 共通祖先の復元を志向した人類進化研究

まず人類進化研究の考え方を基本からみていこう。ちまたに流布する人類進化の考え方のひとつに、系統樹の先端に現生する霊長類をならべて「テナガザルがオランウータンに進化し、さらにゴリラに進化し、さらにチンパンジーやボノボに進化し、チンパンジーやボノボがヒトに進化した」という考え方がある。この考え方は誤っている。系統樹の読み方を理解していないからだ。

人類進化について考えるとは、二つ以上の種を比較し、それらの種の共通祖先が持っていたであろう形質や行動について考察するという態度をいう。形質については化石が最大の証拠となるが、ただ化石を発見するだけではもちろん人類進化について考えたことにはならない。その化石がどの種とどの種の共通祖先にあたるのか、位置づけを探らなければならないからだ。この位置づけは、比較する種と種の最大公約数をさぐることによって可能になる。行動については化石のような直接的な証拠は存在しないが、種と種の行動を比較し、最大公約数的な行動を抽出することで、共通祖先の行動を推定することができる。

こうして、いろいろな共通祖先が推定される。次にするのは共通祖先を並べることである。たとえば a、b、c の3種の動物がいる場合、a と b の共通祖先 X と、b と c の共通祖先 Y と、c と a の共通祖先 Z と、abc の共通祖先 N が想定される。ここで abc の共通祖先 N が系統樹の大元に来るのは良いとして、枝分かれするのは a と Y なのか、b と Z なのか、c と X なのかを考える必要がある。ab が共有する性質が c に見いだされなければ、N から c と X が枝分かれするし、bc が共有する性質が a にみいだされなければ、N から a と Y が枝分かれする、というように考えていく。今は DNA 解析の結果を援用することで系統樹を描きやすくなっている。

人類進化についていえば、類人猿の系統樹は既に完成している。伊谷純一郎の時代には、系統樹を作りつつ、この系統樹の枝分かれするところに位置する共通祖先がもっていたであろう社会構造について推定することに目標がおかれていた。そのために系統樹の枝分かれした枝の先端に位置する現生霊長類の社会構造を徹底的に調査する必要がある。わたしより少し上の世代の霊長類学者たちは全力をあげてこれに取り組んでいる。またサルと比較可能なデータをヒトについても取ることが目指され、とくに人類史(それはチンパンジーとヒトの共通祖先がいた約 500-700 万年前にはじまる)の 99.8%以上が狩猟採集活動によって支えられていることから、ブッシュマンやピグミーの生態人類学的研究が開始されたのである。

2. 伊谷学派における人類進化研究の挫折

ところが 1980 年代後半になると、霊長類学では種間の最大公約数についてあまり考える必要が無くなってきた。それは生物進化についての強力なドグマ「社会生物学」が杉山幸丸の手によってついに霊長類学にも導入され、行動の進化を遺伝子のふるまいとして説明する道が開かれたからである。これは独自の道を歩む日本の霊長類学を、世界の主流となりつつあったトレンドに接続させるという重要な判断であったが、伊谷先生が切り開いた人類進化研究にとりくむ霊長類学者にとっては非常に大き

な衝撃であった¹。

それまでの伊谷学派にとって人類進化研究とはヒトを含む霊長類の諸共通祖先の解明へと向かう研究であった。ところが社会生物学は、共通祖先に遡る方向ではなく、逆に、種の多様化が生まれ出される方向にむけての進化研究を推進していった。もはや共通祖先を考察する必要はなく、すべては環境のなかでいかなる形質や行動をつかさどる遺伝子が繁殖成功をおさめるか、その測定が重要な研究対象となってきたのである。

霊長類額を社会生物学が席卷した 1980 年代後半以降、伊谷学派の人類進化研究は大きく挫折した。当時、わたしと机を並べていた 1 学年上の鈴木滋は「敵のことをしらないとね」と言いながら社会生物学のロジックを批判的に研究していたし、彼らが研究テーマを選定する際に関心を払うのは「いかに社会生物学では説明できないテーマであるか」であった。とはいえ世界規準の研究方法に背を向けるわけにはいかないから、彼らは次第に、どこまで社会生物学的に説明し尽くせるか（そしてどこから先は説明できないか）を明らかにしようと努力していった。たとえば足立薫も、グエノンやコロプスの混群を説明するときに、オートポイエーシス論の導入を目論見ながらも、博士論文では社会生物学的検討を余儀なくされている。社会生物学的検討をすつとばしてその先を議論しても、他の霊長類学者からは受けいれられないからである。しかし、こうなると、まるで彼ら自身が社会生物学論者であるかのような様相を呈することになる。人類進化研究が挫折する前の試みを知らない若い院生たちのなかには、最初から社会生物学的枠組みで研究を進める者もでてきた。論文を生産しやすいこの枠組みに、秀才たちがとびつくのは無理もない。かくして人類進化について考え続ける霊長類学者たちは、霊長類学会のなかでも少数派となってしまった。

一般的に、文化人類学者は人類進化研究を還元主義的であるとみなしがちである。文化人類学者や文化系の学者たちが人類進化研究にたいして抵抗を感じるのは、おそらく人間をサルと同列に論じることへの心理的抵抗もさることながら、人類進化研究が複雑な現象を進化（遺伝）に還元してしまうことへの不満や、複雑な経験のなかで発揮される人間の営みについての考察が欠けていることへの不満があるからではないだろうか。だが、逆説的なことに還元論的議論にあきたらない霊長類学者たちだけが、ほそぼそと人類進化について考えつづけてきたのである。彼らはむしろ霊長類の行動のなかに人間くさい特質を、あるいは人間の行動のなかにサルくさい特質を見いだそうとする人たちであると言って良い。生物学のトレンドからは明らかな落ちこぼれであるが、彼らは霊長類を鏡としてヒトのことを（あるいはヒトを鏡として霊長類のことを）理解したいと考えているのであり、生物学者というよりは、むしろ異文化を鏡として自らのことを理解したいと考える人類学者と同じ存在なのである。

一方、ヒトの研究をしてきた生態人類学者たちも、1980 年代半ばを境に「大きな」人類進化研究の枠組みから撤退していった。サルと比較可能なデータの収集を目指したとき、最初にターゲットとして挙げられたのは狩猟採集社会の解明であった。伊谷は 1966 年にプレバンド・セオリーを考えた。それは、家族の有無にちがいはあるものの、チンパンジーの単位集団と狩猟採集民の居住集団を

¹ 杉山幸丸（編著）（2000）『霊長類生態学』京都大学学術出版会

相同の社会単位とみなす考え方であり、狩猟採集社会の居住集団(バンドbandまたはホルドhorde)の構成原理の解明が目標としてかけられたのである。ピグミーについていえば、ターンブルによって非単系的な関係を基盤としてバンドが形成されていると報告されていた。一方、日本の生態人類学者の調査では、当初、夫方居住や父方居住を基盤としてバンドが形成されているかに思えた。ところが非単系的な関係を基盤とするバンドも確かに確認されたのである。こうしたバンドは、比較のおおきな町の近くにあることが多く、またバンドのサイズも大きかった。そこでピグミーの「本来」のバンドは夫方居住であるが、交易や開発の影響によって可塑的であるという考えにかたむいていった。なかには寺嶋のように、ピグミーの「本来」のバンドは父母双方の親族や姻族を介して形成されると考える者も登場した。むしろ父系居住のほうが他の条件(たとえば近隣農耕民との共生的関係など)によって誘導されたというのである。以上をまとめて市川(1986:306)²は、

人類が特定の社会の型をヒト以前の霊長類から継承したと考えるのは、おそらく妥当ではないだろう。ピグミーの父方居住バンドについて論じたさいに、彼らの社会とチンパンジーの社会の類似を指摘したが、そのような類似は相似(アナロジー)に基づく一面的なものであろう

と述べ、伊谷流進化論の適用に疑問を投げかけている。サルとヒトを同じ枠組みで扱うことの難しさを痛感した市川の重い発言であるとわたしは思う。結局、日本の生態人類学者たちはいちばん重視していた社会構造の比較をなしとげられなかったのである。

これ以降、生態人類学者がとりくむのは「小さな」人類進化の研究、すなわち現生人類が自然環境にいかに対応し、自然環境をいかに利用してきたのかという生業研究に特化していった。先の論文の最後に、市川は独自の進化論を示している。彼は狩猟採集社会を「ヒト以前の霊長類の種に特異的な社会の型から解放され、可塑性を獲得した人類が、それによって生み出された多様な可能性をまだ失っていない状態」と考えた。さらに、種に特異的な社会の型からいったん解放された人類社会は、ふたたび「特殊化」をし、きわめて限定された社会の型だけを持つようになっていくと考えた。その射程が、伊谷進化論とは比べようもないほど短くなっていることが確認できるのである。

3. 人類進化研究の命脈

かくして京都の人類進化研究は著しく停滞し、霊長類学者も生態人類学者もそれぞれの関心にしたがってバラバラの方向を向くようになっていった。わたしよりも上の世代の人びとも、進化について発言することはほとんどなくなった。個別の面白いテーマに夢中だったのだ。ヒト屋とサル屋は一緒にゼミを続けていたが、わたしが大学院生であった1988-1995年頃には、人類進化研究はほとんど死んでしまったかに思えた。またアフリカ地域研究センターが作られると、そちらに移った生態人類学者や院生たちは人類進化論研究室のゼミに出席しなくなっていった。当時、人類進化について考えねば

² 市川光雄(1986)「アフリカ狩猟採集社会の可塑性」伊谷純一郎、田中二郎共編『自然社会の人類学』アカデミア出版会

ならぬと思っていた若手学者は河合香吏だけで、彼女にしてからが若い院生にむかって「サルのこと知らんとイカンのやあ」とホエザルのように叫んでいたにすぎない（それでも効果はあったのだから、ホエザルも捨てたものではないが）。

この時代、人類進化研究の命脈を保ったのは、コミュニケーション学派を名乗る菅原と北村の、かつて狸谷の下宿に巣くった二人であった。彼らは共にサルの研究から出発しヒトの研究へと進んでいった。二人ともサルを観察するような視線をヒトにも投げかけていった。こうした独自の研究歴にくわえて、彼らは「コミュニケーションの進化」をテーマに掲げていた。ここに伊谷学派の人類進化研究は命脈を保ったのである。

けれどもその人類進化研究は、伊谷がめざしていた人類進化研究とは、共通の精神を有しつつも、大きく異なるものであった。共通の精神を有しているというのは、たとえば「a、b、cの異なる生物が存在するとき、aとbは共通の特質をもっているが、cは持っていないならば、aとbの共通祖先Xとcがまず分岐する」というような考え方を、基本的に踏襲しているということである。この共通祖先に遡及するという姿勢は、次節に述べるように、河合研究会の「基盤」という概念とも重なりあう重要な方向性である。

その一方で、北村の人類進化研究は伊谷のそれとは大きく異なっている。以下は喩えであるが、北村の論文には二ホンザル、チンパンジー、ブッシュマン、トウルカナ、ドウルマが登場したりするように、a、b、cに該当するのが生物種であるとは限らなかった。コミュニケーションの形式に違いがあるならば、そのコミュニケーションをつかさどる集団は大胆な比較の対象となるのである。ただここで急いで確認しておかなければならないのは、北村はブッシュマンやトウルカナのコミュニケーションの形式について考えているのであって、そのコミュニケーションをつかさどる人間集団どうしの進化の順番を考えているわけではない。ここで見ていることは、ヒトがとりうるコミュニケーションの形式の広がりなのである。また二ホンザルやチンパンジーが登場するのは、ヒトがとりうるコミュニケーションの形式の基盤が、原初的には二ホンザルにも、そしてやや広がりをもったかたちでチンパンジーに見いだせる（あるいは見いだせない）ことを示めさんがためである。つまりヒトとチンプの共通祖先にはその基盤がある程度用意されているとか、ヒトとチンプと二ホンザルの共通祖先にさえ、その基盤が原初的に存在するとか、あるいは原初的にも存在しないと、そのような差違を示すことで、どこまでそのコミュニケーションの形式の起源を遡及できるかを示しているのである。

かつて伊谷は、ソリッドな社会構造を対象に進化を考えようとした。そしてヒトにも（あるいは、せめて狩猟採集社会くらいには）ソリッドな社会構造があると考えたところに挫折があった。一方、北村はヒトの多様性をそのまま扱うことによって伊谷を乗り越えようとする。北村のやり口が伊谷人類進化論の発展系であることは、共通祖先へと遡ろうとする点においてはつきり理解することが出来る。

4. そして今、「人類社会の進化史的基盤」をどのように考えるか

さて、河合研究会が掲げる「人類社会の進化史的基盤研究」には、進化史的「基盤」研究と書かれているように、霊長類の一種であるヒトにそなわった基盤、すなわちいろいろなやり方をとることを可

能にするだけの基盤、について研究しようとしている点で、北村の人類進化研究の影響を強く受けている。その基盤とは、盤石の一枚岩的な基盤なのではなく、より多くの生物に普遍的で基層的な基盤もあれば、ヒトとごく近い霊長類だけが共有する基盤もあるだろう。この節では、その基盤について考えるやり方について考えたい。

「基盤」を志向するということは、社会生物学が展開する「多様性を遺伝子に還元する」研究ではなく、逆に、人間社会の多様な現象を、その進化史的基盤へと遡行していくような研究である。ここで進化史的基盤のことを、遺伝子やその他の「生物学的基盤」と限定する必要はまったくない。ここでいう基盤研究とは、人間のいろいろなやり方を統一的に理解できるようなアイデアを提出しあいましようという、そういう意味なのだと思う。そしてこの部分で、ヒトだけでなくサルにもそのアイデアが適用可能であることが、進化史的基盤をそなえていることの例証となるであろう。

たとえば北村お気に入りの「アフォーダンス」なんて言い方は、適切な例となるだろう。人間はいろいろなことを自分の頭だけで考えてやっているとこころでいるけれど、実は物質がアフォードしてくるのだ、とするこの考えは、一気に人間の思考の基盤をミミズとの共通祖先にまで遡らせてしまう。ダーウィンが調べたように、寒くなるとミミズは巣の穴を適当な大きさの、適切な形をした葉でふさぐが、このミミズの情報処理系と同一の処理系を人間も持っているというのである。けれどももちろん、人間はミミズよりも多様なやり方でアフォーダンスを活用しているわけで、たとえば湖中による牧畜民サンプルの廃物利用（古タイヤを加工してサンダルをつくったり、ドアの蝶番にしたり・・・）の研究みたいいろいろなやっている。進化史的基盤とみなせるアイデアが、どれほど多様な行為の基盤になっているか、またどれほどサルにも適用可能であるかを眺めるといのが、この研究会のさしあたっての目標ということになるのではないだろうか。ここで目指されるべきは、複雑な人間の現象を遺伝子や生物学的基盤に還元することではなく、その基盤の運用のされ方なのである¹。

だからこの研究会につどう人類学者は、「ルオ民族の現象をサル学と接続させるためには、異民族と混交していない『純粋なルオ民族』を探し出さないと議論できない」などと思ひ悩む必要はまったくない（またそんな民族が存在するはずもない）。むしろ「ヒトはこんなに混交できちゃう」と考える方が、サル学との接続が可能になるのである。これを聞けば、サル屋たちは「チンプだつて雌なら他の集団と混交できるんだよな」とか「ヒトが混交するといつてもそれはヒトという同一種内の話であつて、混群とは違うよな」とか考えるに違いない。

もちろん上の例は、非常に単純化した言い方であつて、「ヒトはこんなに混交できちゃう」とはいつても、いつも出来るわけではないし、混交できる人たちと、混交できない人たちの界面も存在するだろう。意図的に混交することもあるし、気づいたら混交しちゃつたということもあるだろう。おそるおそる混交することもある。その具体的な報告をすることが、出発点になる。そしてそれを（その一部を）統一的に理解するようなアイデアをだすことが、進化史的基盤について考えるということである。今、わたしが暖めている「行為をするときに集団が形成される」というアイデアも、きっとヒトの集団やサルの集団について、あらたな洞察を導いてくれるだろう。

おわりに

近年、いわゆる標準的な霊長類学者や生態人類学者たちは、「進化」という言葉を使わなくなった。けれども河合があらためて「進化」を持ち出してきたのは、逆に今こそ進化史的基盤について考える条件が整ってきたと判断したからであろう。たとえば文化人類学に引き寄せて言えば、人間の慣習的行為についての研究が劇的に進んだことと強く関係しているだろう。もし人間が、意識的な行為（プラクシス）だけをする存在であるならば、サルとの接点はまるでなくなってしまふ。日常的に繰り返され続けられる慣習的行為こそが、人間社会をつくりあげる重要な行為であるとするこの知見は、人間社会の進化史的基盤について考える重要な条件になっている。また霊長類学に引き寄せて言えば、オートポイエーシス論やルーマンの社会システム論をとりこもうとする一部の霊長類学者たちの努力が実を結びはじめ、サルの行動が従来とはまったく別の（そして文化人類学者にもなじみある）角度から検討されはじめている。これも進化史的基盤について考える重要な条件といえるだろう。

これまで文化人類学と、生態人類学・霊長類学は、それぞれの分野の先鋭化にとりくみ、たがいに交流することは稀であった。けれども、わたしたちは意外にも同じ言葉や概念をつかって対象を理解しはじめている。その言葉や概念の広がりや、わたしたちはこの研究会で学び、確認することができるのではないか。そんな期待を抱いている。

集団という現象にひきよせて考える

1. サルのようにヒトを観る：集団の可視性

霊長類学者と一緒に考えると、人類学者が当然視している概念が、さほど自明のものでもないことに気づかされる。霊長類学者が使っている分析概念は、もともと人の世界の日常語から借用したものであるが、彼らの言葉の使い方をみていると、逆に、人間の世界のことが良く分かるようになってくる。たとえば霊長類学者は「群れ」のことを「集団」と呼んでいる。「群れ」は観察可能なサルのあつまりであり、その可視性に依拠しながら、彼らは「集団」について考えてきた。これを逆に人間に投げかけるならば、人類学は不可視のヒトのあつまりも、当然のように「集団」と呼んできた。たとえば日本民族とか、津軽人・南部人とかいうように。けれども霊長類学者たちの使い方によって、「集団」とは観察可能な存在でなければならないということに拘るならば、人類学が当然のこととして使ってきた集団という言葉の使い方が、まったく当然とは言えなくなってくる。この立場をつらぬくには、さしあたり人間の言語使用について除外し、観察だけで議論する必要があるだろう。もちろん観察すると言っても、民族集団の違いは服装などでもわかるから、まずは集団についての思考実験をそこから始めよう。

まず霊長類学者のやり方から見ていこう。その初期の段階においてチンパンジーの集団には安定したまとまりなど存在しないと考えられていた。チンパンジーがくりひろげる奔放な集散が調査者の目を眩惑したのである。しかし伊谷純一郎と鈴木晃は、偶然、チンパンジーにも安定的な単位集団が存在すると確信するにいたる観察をすることに成功した。それは1965年、タンザニアのフィラバングアでおきた。乾季が深まった9月のある日、原野を43頭のチンパンジーが一列になって尾根を越え

ていったのである。彼らはこの群れに含まれる個体の性・年齢構成を記録し、この群れを単位集団にちかものであるという確信を持ったのである。その後、この大きなチンパンジーの群れこそが単位集団なのだと思われていく。そしてこれをもとにして、集団間関係も観察されてくる。チンパンジーの集団間関係は敵対的であった。

それでは、これを人間に適用したらどうなるだろう。たとえば、ケニアのどの町でもよいが、そこにはほとんど喧嘩しないで一緒にいろいろな人が住んでいる。チンパンジー学者的な目で見れば、この人たちは、ひとつの集団に見えるに違いない。これをわざわざ、サンプルやドロボーやレンディーレの異なる集団と一緒にいると記述するのは、おかしい。彼らは確かに数年に一度くらい紛争することはあるかも知れないが、チンパンジーの単位集団同士の恒常的な敵対関係に比べれば、圧倒的に平和的である。言語に依拠しないで、町の人びとについて記述するならば、彼らを別々の集団の共存として記述するのは絶対おかしい。彼らはひとつの集団として記述されてもよいはずである。逆に、もし彼らがしょっちゅう争いあえば、チンパンジー学者はヒトの単位集団について報告することだろう。

今度は、もっと詳細にこの町の人びとの「あつまり」をみていこう。なんらかの定義をつけて「一緒にいる人びと」をカウントしていけば「あつまり」を発見できるに違いない。けれども、おそらくサンプルとかドロボーとかレンディーレとかいう「集団」は発見されないだろう。たとえばクラスター分析をしてみれば、多くの「集団」が発見されるだろうが、それはおそらく夫婦とか、親子とか、男どうしの集まりとか、女どうしのあつまりとか、友人・恋人たちといった小規模な集団になるにちがいない。つねに仲間同士で移動しているサンプルのモラン（戦士）などは、ガゼルの雄の群れのように記述されてしまうかもしれない。

こんなことを考えているだけで、なにか分かったわけではないのだけれど、霊長類学者のように可視的な群れを「集団」としてみていくと、人類学がア・プリオリに対象としてきた民族という人間の集団を、はたして集団と呼んでよいのか全くわからなくなってくると感じる。まずは人類学者も「集団」の記述の仕方からはじめてみよう。

2. 集団は行為とともに現れる

人間には中間集団がたくさんある。人間の集団を民族というひとつの集団に決めつけて話すことはないはずだ。いろいろな中間集団を念頭において考える必要があるだろう。たとえば冒頭にあげたチンパンジーもそうであるが、単位集団の内部にはいろいろな集団が形成されている。ただしそれらの中間集団は安定的な構造をなすものではなく、一時的なまとまりということでパーティとかサブグループと呼ばれてきた。人類学もこういういろいろな集団をあつかっていかなければならない。それで、こういう一時的な集まりも「集団」として捉えるとするならば、「集団」という言葉をどのように捉えておけばよいのでしょうか。わたしは「集団という概念は、つねに行為とセットになっている」と考えればよいと思う。

たとえば、以前、トゥルカナに行ったときのことである。ある日、太田さんが留守で、わたしは

村でぼんやりしていた。すると急にブッシュのなかから青年が飛び出してきた。それをみた口キパカは、急いでアームナイフを装着すると逃げだした。啞然とし、何か大変なことが起きたと心配していると、帰ってきた太田さんが「ああ、それは集団お仕置きだ」と教えてくれた。「口キパカや他の青年たちが、家畜の放牧をする弟たちをしっかりと監督しないのはけしからん」ということで、口キパカたちは捕獲され、説教の場に引きずり出されたのである。説教の後、罰として口キパカたちが供出したヤギをみんなで美味しく食べたのが思い出だ。

さて、この時のことを、可視的な集団として捉えなおしてみると、そこにはお仕置きをするための、長老から青年までを含む集団がつくられていたことになる。これは青年をつかまえ、説教し、ヤギを提出させ、食べたらそれでおしまいという一時的な集団であった。「お仕置き」という行為をする限りにおいて成立していた集団なのだといえるだろう。

他にもいろいろある。たとえば黒田さんや鈴木滋さんたちが、ンドキの森でゴリラとチンパンジーの共存について報告していたけれど、これなどは、最初から異なる「集団（つまりゴリラの集団とチンプの集団）」の共存として描かれた節がある。けれども一匹のゴリラと一匹のチンプが一緒にいたら、それはどんな感じなのだろう。集団はふたつあるということになるのか、異種であっても集団がひとつあるということになるのか。わたしとしては集団がひとつあるということにしたほうが面白い。前に動物園で孤児ゴリラと孤児チンプの子供と一緒に遊ぶと、遊びにならないという話を黒田さんがしたことがある。それは確か、棒の周りをぐるぐる回る遊びをすると、チンプがすぐにゴリラに追いついてしまって終わってしまうとか、レスリング遊びをしようとするゴリラにガツシリおさえられてチンプが悲鳴を上げて終わってしまうとか、そんな話であった。けれども遊びの開始が成立すること自体、彼らは「集団」を作っていたと言えないだろうか。この場合、「遊び」という行為をする限りにおいて、異種の動物においても集団が形成されたということになる。

もっともチンプがコロブスを狩猟する場合、複数のチンプは集団を作っていると言えるけれど、チンプとコロブスが一緒に集団を作っているとは言えない。だから「ともに何かを行為するとき、諸個体のあつまり（＝集団）ができる」と言い換えた方がよいかもしれない。

つまり霊長類学者の態度で人類の集団の観察に臨むならば、まず民族やその他の集団を指示する言語（サンプルとかチャムスとか）を括弧にいれて、どのような集団がどのような行為とセットになって成立しているかを記述すべきなのだろう。たとえば上のゴリラとチンプのように、一緒に遊ぶ限りにおいて集団が成立する。今村薫さんはブッシュマンの女たちについて書いているが、一緒に採集に行く限りにおいて集団が成立すると考える。あるいは原野を一列になって移動していたチンプにしても、それは一緒に移動するという行為とセットになって、そのときに限り集団が成立していたということになる。それを「単位集団」などという特権的な集団とみなすかどうかは別にして、可視的な集団はつねに何らかの行為とセットになって成立しているのである。早木さんが研究会で遊びの話をしたのは、行為を先に記述するという点からすると、とても意味深であったと思う。言語を除外して、まず集団とは何かについて考えるならば、民族の名称などではなく、行為を中心にして集団を記述すべきだと思うからである。

3. 「集団」は能動的、「クラス」は静止的

とはいえ、人間はやっぱり言語によって自然や社会や身体の分節化を試みる動物である。そこで次に考えるべきは、カテゴリー(またはクラス)と集団の違いである。カテゴリーやクラスと集団とは、どのへんが同じで、どの辺が違うのかを考えておく必要がある。人間の話になると、すぐにカテゴリー・クラス・集団の概念がゴチャゴチャになっているような気がするからである。

そこで、わたしは集団という概念は「能動的」な人間の活動にたいして用いられる言葉で、カテゴリーやクラスは「静止的」で観念的な分析上の概念であると区別したいと思う。クラスは外延的にも内包的にも定義することができる、とされている。けれども中山元³が簡単にまとめているように、外延的なやり方だけで定義することはできないし、内包的なやり方だけでも定義することはできない。たとえば外延的に、これもネコである、あれもネコである、と決めていくためにはあらかじめネコとはなにかという概念があらかじめ分かっていると決められない。一方、「ネコ」を内包的なやりかたで「ネコは四つ足で、にゃあおと鳴く」と定義したばあい、先天的な異常で3つ足に生まれた動物はネコではないということになってしまう。でもわたしたちは直観的に(つまり外延的に)、これもネコだとわかる。だから、わたしたちは内包によって外延をきめているだけでなく、同時に外延によって内包を決めているといえる。内包的な定義をおこなうためには現実を参照せざるを得ず、内包と外延はくっついているという。

さてこの話のどの部分を考えたいのかというと、外延(extension)のほうである。外延は、その語義(ギリシャ語の伸ばす[tendere]という語に外のを示す接頭辞ex-がついている)のとおり現実の中で定義に合致する事物を伸びながら広がりながら探しだしてくる。ここで重要なことは、この外延の伸びかたや広がりかたである。外延は、世界中のすべてのネコ(過去に存在したネコも、未来に生まれてくるネコをもふくむ)を対象につかまえてくる。たしかに外延としてとりあげられるのは、具体的な個々のネコということになるが、その具体的であるはずのネコですら、まだ生まれてきていないネコも含まれるというように、未来に開かれている。具体的と言いつつ、実は抽象的。つまりここでいう外延は、過去にも未来にも、そして全世界にひらかれた抽象的な具体性なのである。この場合、ネコは全世界のどこにいてもかまわない。それを人間は観念のなかでひとつのクラスにまとめている。世界のどこかにばらばらにいる不可視のネコをむすびつけるのが、カテゴリーとかクラスという概念になる。

一方、集団は、先に可視性を条件に加えておいたからでもあるが、もっと具体的で、目の前にいる人だけに限定したあつまりということになる(というか、そういうものとして理解したい)。目の前にいない奴を指して「あいつもこいつも同じ集団だ」と観察者がいうのは避けたい。それは、むしろクラスなのだ。実際にメンバーが、自分の足で歩いて集まらない限り(これを能動的と呼びたい)集団は形成されない。一方、クラスはどうかというと、実際に集まらなくても想定することが出来る(これを静止的と呼びたい)。

³ 中山元(2000)『思考の用語辞典』筑摩書房

具体例をあげるとすると、age-set みたいな奴が考えやすい (age-group とか年齢集団という言葉は、「集団」という言葉を含んでいるからちょっとまずい)。たとえばガブラの age-set のひとつであるイジャルサとは、クラスにつけられた名称 (カテゴリー) である。地域のいろんなところにイジャルサというクラスに属する個人が分布している。けれどもこれは集団ではない。そのままでは不可視の存在だからだ。彼らが集団になるのは、儀礼などの共同で行う行為のために、能動的に集まってこなければならない。集まったときにはじめて集団が形成されたことになる。中村香子さんが高地サンプルと、低地サンプルの age-set の違いについて論じているが、このように地域のなかに複数の集団が形成されることはありうる。これを同じ age-set というクラスに属しているからと言って、一緒の集団として扱ってはいけないという気がする。

このように言ってくると、カテゴリー・クラス・集団の違いがハッキリしてくる。「民族」はカテゴリーやクラスの話であって、現実の集団として現れることはほとんど無い。カテゴリーやクラスを先験的な知識として集団を動員することはあるけれど、その集団が、クラス全体を包括することは、民族のレベルではほとんどおきようがない。せいぜい家族ぐらいが、カテゴリーとクラスと集団が一致する最大の単位となる気がする。田舎で法事をやるときに親族が集まるけれど、かならず何人かは仕事が忙しかったり、入院していたり、出産したばかりだったりしてあつまれない。親族 (その大きさはいろいろだが) であってもカテゴリーやクラスと集団とが一致することはあまりない。それはアフリカの小さな社会でも同じことだ、と考えておきたいのである。

4 . カテゴリーによって動員された集団と、行為によって形成された集団

今村仁司先生の話 (2005 年 11 月 5 日発表 : 河合メール 10 月 31 日に添付) とか、去年の船曳さんの話などは、具体的に個人が集まる話をしてしているわけではないので、カテゴリーとクラスの話であったと思います。この辺の話は、とくに人間においては、具体的な集団を動員するときの前提になるので重要だと思います。先に書いた儀礼の場合でいえば、たとえばサンプルの新しい age-class が作られると言うとき、そのクラスやカテゴリーの名において、適齢の少年たちに動員がかけられ、具体的な集団が形成されることになる。戦争のときにも、民族の名において動員がかけられる人の範囲がさだめられ、その人たちが呼び掛けにこたえることで具体的な集団をつくることになる。

この話は霊長類とも接続させることが可能なはずである。たとえば今年の霊長類学会のシンポジウムで古市さんがレビューしているのを聞いていて思ったことだが、チンプが他の集団の攻撃に行くときは、彼らもカテゴリーやクラスを想定して集団を形成しているのかも知れない。チンプが他の集団を攻撃するときには、朝からオスたちが不穏な動きをして凝集性のたかい集団をつくり、別の群れの方に向かって歩いていくのだとか。カテゴリー・クラスと集団を分けて考えることで、この辺のことが進化の話として繋がってくる気がするのである。

だけど、もうひとついえるのは、別にカテゴリーやクラスがなくても、集団は具体的に形成されうるということで、それが先にのべた「行為によって集団が成立する」と言ったときの「行為」という言葉の射程になると思う。つまり儀礼 (という行為) のように、はじめから限定的なカテゴリーやクラスを想定し、具体的な集団が動員されるというようなケースの他に、能動的な行為に同調す

ることで具体的な集団が形成されるというケースもあると言いたいのである。たとえばチンプが狩りをするとき、彼らは狩りをしようとなんて思っていないだろう。誰かが狩りはじめたときに、他のチンプもそこに参加して集団が形成されていくのではないだろうか。あるいは伊藤詞子さんがチンプの単位集団について議論するときにもちいた「ついていく、ついていかない」という分析の仕方は、行為が先に立って集団が作られていくというような可能性を豊かに語ってくれているような気がする。また、このまえの床呂さんのお話も、具体的な集団というところまでは見えなかったが、個々の船の移動の記述からはじめている姿勢が「行為が集団に先行する」という考え方を目指しているように思えるのである。

5. ホフテとは誰か？

さて、このように言ってきたとき、わたしが調査している人びとのなかでもっとも気になっているのは、ホフテ (Hofte) と呼ばれた人びとのことである。1920年代に書かれた植民地時代の報告を読むと、この人びとがラクダ牧畜民ガブラやウシ牧畜民ボラナなどの名前に混じって登場する。1922年の年次報告では、植民地政府はホフテをガブラともボラナとも決めかねて、ホフテをガブラの一セクションとして記載し、しばしばボラナーガブラと言及した (Hussein Tadicha 2006)。たしかに、この報告書をさらに年代別に見ていくと、マルサビット町の地区長官をつとめた Sharpe は1927年にはホフテ出身のチーフであるソラ・ブルスラをガブラであると記している (Gabra, Hofteh) のに対し、1928年以降はボラナとして記載するなど (Boran, Hofteh)、決めかねている様子が見える。

ガブラの年代記を再構成したロビンソンは、ガブラへのインタビューをもとに、1921年が、ホフテと呼ばれる人びとがエチオピアから国境をこえて逃れてきたことにちなみ、「ホフテが逃げてきた水曜年」と名付けられたと述べている。ロビンソンはホフテについて括弧付きでボラナと記している。その逃亡の原因については、アビシニア人を怖れたか、旱魃が厳しかったからか、あるいはその両方であると述べている。

このボラナともガブラとも判断付かない人びとに興味をひかれて、わたしはここ数年、「ホフテとは誰か」と質問し続けてきた。けれども、その結果は芳しくなかった。ケニアのガブラに聞くと、ホフテとはボラナのことであると言ったり、知らないと言ったりする。エチオピアのガブラに聞くと、「ホフテはガブラだ。盗人だと歌にある」と言う者もいれば、「ホフテはサク工のことである」とする者もいた。しかし誰も詳しいことをしらなかった。

去年、出版されたボラナ文化についての事典には、ホフテのことが記されている。読むと次のようになっている。

オーフテ: マルサビットにかけてのゴルボ地域とマルベ地域にすんでいるボラナとガブラを指して使う。オーフテと呼ばれるのは、彼らが家畜と一緒に移動するからである。ケニアでは、ホフテ (Hofte) と記され、1920年代にマルサビットへと南進したボラナを指している。(Leus, T. 2006)

ここでいうマルベ地域というのは、エチオピア南部を南北に縦貫するエチオピア・ハイウェイの西側に当たる地域である。今年の夏、わたしはマルベ地域の北端にあたるホボック地域で聞き取り調査をおこなった。ここで会ったふたりの男性は、1990年にわたしと会ったことがあるという。ひとりにはボラナであり、もうひとりにはガブラであると名乗った。しかしこのガブラを名乗る男性はボラナの村に住んでおり、家のかたちもボラナの家であった。つまり彼はガブラとボラナの両義的な存在であるように思えた。

さて、彼らの説明は Leus のそれと同じであった。つまりホフテの本の語はオーフテであり、これは家畜を移動させる（オーファ）に由来する。ガブラであろうとボラナであろうと、頻繁に移動する人びとを指してホフテと呼ぶのであり、ホフテという民族やフラトリーなどが存在するわけではない。とくにこの地域に住む人びとは、頻繁に移動することからホフテと呼ぶらしい。

もし彼らの説明や、Leus の説明が正しいならば、植民地政府はガブラやボラナの人びとが認識していない人間のカテゴリーを創出したのだと言えるかも知れない。そしてそのホフテなる人びとから徴税するために、植民地政府はチーフまで任命していた。1920年代、エチオピア南部ではティグレとよばれる盗賊（おそらくは象牙ハンター）が跳梁し、現地の人びとから家畜を奪ったので、大量の人びとがエチオピアから植民地ケニアへと流入していたことが、わたしの調査でも確かめられている。エチオピアから逃げだしたのはガブラだけでなく、より定住傾向（テソ）のつよいボラナの人びとも含まれていた。おそらくこの逃げ出した人びとを（おそらくそれは「難民」とでも名付けるべきだったであろう）、植民地政府はホフテという民族（または民族の下位セクション）として認識してしまったのである。一般的に、ガブラは頻繁に村を家畜と共に移動させる傾向があるのに対し、ボラナは定住傾向が強い。けれどもこのとき逃げだしたボラナの人びとは、おそらくガブラのように振る舞った。つまり家畜と共に頻繁に移動したのだらう。だからこそ植民地政府は、この人びとを最初、ボラナではなくガブラとして認識したのではないだろうか。その一方で、この人びとはガブラのような移動の様式美を備えていなかったのではなかったか？ ガブラは移動する際には、家屋をラクダに美しく積みあげる。この様式美を彼らは誇りにしており、民族アイデンティティを構成する要素のひとつとなっているほどである。しかしホフテと名付けられた人びとは、ガブラのように（そしてガブラと共に）移動する人びとでありながら、この様式美を踏襲することまではできなかつたらう。ボラナは基本的にラクダを飼育していないのだ。ガブラと共に移動しながら、ボラナのように見えるこの人びとを、誰と認識するべきか、植民地政府の戸惑いが目に浮かぶ。いずれにせよ、この誤った認識をひきだしたのは、非常に流動的な移動という「行為」であった。ひとびとの行為が、あたかもホフテという集団が存在するかのように見せてしまったのである。そのホフテを注視したとき、それがガブラのようでもあり、ボラナのようでもあったというのは当然のことであった。

さて、ドイツの民俗学者ギユンター・シュレーは、著書『浮遊するアイデンティティ』のな

⁴ Leus, Ton. (2006) Aadaa Boraanaa: A Dictionary of Borana Culture.

かで2箇所だけ、ホフテ（彼はホフテ・ボラナと記載している）について触れている。彼がホフテに言及している箇所では、いずれも「創出」された民族の名前が挙げられている。たとえばアリアール、Ilgira-Turkana などである。すでに北村さんが紹介したように、内藤君はアリアールという牧畜民サンプルと牧畜民レンディーレのあいだのような民族の生成について議論しているが、アリアールというカテゴリーは外部者（観察者）が命名しているだけで、レンディーレにもサンプルにも存在していない。せいぜい「どこそこのマソラクラン」という地名とクラン名を重ね合わせた形でのみ言及される人びとである。けれども、たしかにアリアールという名指しを彼らがうけいれていないにせよ、「どこそこの」という指定がなければ、第三者にとってただちに了解できる存在ではないという意味で、アリアールは「創出」されたといえるだろう。

ところでホフテはどうだろうか。ホフテの名前は1920年代の植民地記録に登場したあとは、まったく記録にも登場しなくなってしまう。1929年の年次報告には「ホフテの（チーフである）ソラボルスラは一年のほとんどをアビシニアにいた」と記しており、彼らが逃げだす原因となったティグレが掃討されたのともない、エチオピアに帰還しつつある様子がよみとれる。どうやら彼らのあるものはエチオピアにもどり、あるものはケニアのボラナのなかに容喙してしまったようである。

このホフテが、わたしが「行為によって形成された集団」のイメージにぴったりする。ホフテは一時的に逃避という行為によってガブラとボラナをまたぐように形成された。ところがホフテは、植民地政府から徴税に対象として固定され、さらに徴税のたびにそのカテゴリーが呼び起こされたにもかかわらず、消滅してしまった。これはアリアールとは正反対のように思える。北村さんが発表の時に使った内藤君のアリアールの話では、まず新参加者がクラン（カテゴリー）への帰属を「言明」し、つぎに当事者どうしのあいだで一緒に住み、儀礼も共にするなど経験の共有という「事実」が積みあげられ、さら第三者をも含んだ「共有」が達成されることで、新しいクランへの帰属が実現していくのだという。内藤君はこの3つの過程全体を指して「同一経験の共有」と呼んでいる。同一経験の共有をとおして、自分たちのことをひとつのクラスやカテゴリーと考えるようになっていく。さらに、そのカテゴリーの名において共同で割礼をしたりして、具体的な集団を形成したりすることもある。そんな話であった。こうしたアリアールのカテゴリーと集団の循環する関係が、よりつよい民族（あるいはマソラクラン）の形成へと向かっていったのは、やはり人びとの具体的な交渉が繰り広げられ蓄積されたからであろう。だからこのクランの形成は、地縁的である。しかしホフテの場合、移動が宿命づけられた集団であった。ホフテのカテゴリーと集団の循環する関係が、民族（あるいはホフテフラトリーまたはホフテクラン）の形成へと向かわなかったのは、そうした地縁性のなさに関係しているのかも知れない。

¹霊長類学の古典的な研究手法のひとつに、ヒトとサル境界を壊そうとする手法がある。たとえばヒトには文化があるといわれれば、サルにも文化があるという証拠をしめしたり、ヒトには言語がある

といわれれば、サルにも文法があることを示したりするというやり方である。このやり方は、一見、人間の進化(史)的基盤がサルにも遡ると言っているようにも見える。けれどもこの主張に対する人類学者の側の反論が「それでもヒトは、サルにはできないことができる」というヒトとサルの境界線引きに終始していたことを思い返せば、この古典的なやり方が霊長類学者と人類学者の双方に豊かな認識をもたらしてくれたとはいえない。河合研究会や北村進化論が目指すやり方とはまったく違うと理解しなければならない。大切なことは、進化的基盤がヒトの世界やサルの世界でどのように運用されているかを統一的に理解することであって、ヒトとサルの線引き合戦をすることではない。

集団からネットワークへ 田中雅一(京都大学)

1 はじめに ジラルールの欲望の三角形を超えて

2 社会進化論における集団
社会進化と学説史／人類史における社会進化論／メイン、デュルケム、テンニエスなど
本節では、19世紀から20世紀初頭における社会進化論を紹介する。そして、そこに今日のネットワーク論につながる視点を探る。

3 ネットワークへの理論的視点 ネットワーク論の生成

ネットワーク論の古典／定義／背景 都市研究、個人への関心／構造機能主義批判
／他領域との関係 都市社会学、狩猟採集民研究など

ネットワークは二つの視点から理解できる。ひとつは、ネットワークは普遍的であり、これまで論じられてきた諸集団の性格そのものを批判的に論じる視点としての意義を強調する場合である。もうひとつは、集団がネットワーク的な編成へと変化してきたという歴史視点である。ただし、ネットワークについての先行研究において明白な区別がなされているとは言えない。たとえばボアセベン¹は以下のように述べているが、引用文にある「現実」とは普遍的な意味であろうか、それとも限定された意味であろうか。

「要するに、社会の静態的な構造-機能主義モデルは、現実の人間が相互作用するレベルでは役に立たないということが、・・・明らかになってきたのである。」

4 ネットワークへの理論的視点2 親族研究における relatedness

Janet Carsten による relatedness 論の位置づけと、その批判的検討を行う。

5 ネットワークへの歴史的視点

本節では、確固たる境界や帰属意識を前提とする集団が、近代、ポスト近代の歴史的段階を経て衰退し、代わって生まれるのがより柔軟で平等主義的な人間同士のつながりであり、それがネットワークだという議論を検討する。山住勝広・ユリア・エンゲストローム編『ネットワーク——結び合う人間活動の創造へ』2008 などを取り上げる。

6 ネットワークとエイジェント(代理主体)

複数の人がまとまる関係を集団ではなく、ネットワークとみなす視点において無視できないのは、

そこでどのような人が想定されているのか、ということである。この点についてエイジェントをキーワードに論じる。また、ネットワーク論に付随する重要なテーマとして、ケア、親密さ、身体接触についても触れる

7 おわりに

狩猟採集民の集団特性とその進化的意義

寺嶋秀明（神戸学院大学）

■まず、狩猟採集民の集団についてその具体的な特性を論ずる。いわゆるバンドはかつて想像されたようなタイトな輪郭をもったものではなく、かなり柔軟なメンバーシップをもったものであることが明らかになっている。これはバンドのそれぞれのメンバーの視点からみるならば、自分のバンドはこれと決まったものではなく、さまざまな要因によってしばしば変転するものであることを示している。通時的にみるならば、個人はいくつもの重なり合うアイデンティティをもっているということになる。バンドのフレキシビリティの例として、「父系バンド」とされたムブティ・ビッグミーの事例や、オーストラリア・アボリジンにおける「ワン・カントリーマン」の事例を示す。こういった集団のメンバーシップのフレキシビリティがなにかから由来するのかが、一つの問題となる。

■一方、幾重にも重なり合うアイデンティティのなかで、ある瞬間、あるバンドのメンバーとして暮らしている者はどのようにしてその特定のバンドへのアイデンティティを維持するのか。あるいは、どのようにしてそこに「われわれ」を感じるのであるのか。それは、極言するならば「いっしょにいること」につきるだろう。いっしょにいるからこそ仲間なのであり、仲間だからいっしょにいるのである。そしてその相互依存関係を確認するものの一つとして、きわめてパターンの食物分配がおこなわれる。狩猟採集民の食物分配は、生態学的適応ではなく、そういった生態学的適応の基盤をなすバンドの社会性の創出と理解されなければならない。生態学的配慮とは無関係におこなわれる実際の食物分配の事例をいくつか示す。

■しかし、食物分配だけが社会性や集団を作り出すのではない。究極的にはバンドのメンバーは「同じ」でなければならない。そしてそれは「同じことをする」ものたらずでなければならないということである。「同じことをする」とは、伊谷がニホンザルの挨拶音声についての洞察から見いだした平等原則そのものであり、人間社会にもそのまま通底しているものである。「同じことをする」とは、より一般的には「相称的行動」とよびうるものである。狩猟採集民の平等主義は、理念でも理想でもなく、同じことをする＝仲間である、という方程式の読み替えにすぎない。こういったところで実際の「平等的行動」が発現していると考えられるのか、具体例からいくつか示す。

■狩猟採集民の平等性を論ずるときに、深刻な「物言い」として、年齢および性による不平等があることがしばしば指摘される。狩猟採集社会でも老若の差異や男女の差異は歴然としており、それにし

たがって個人間の行動にもすくなからぬ差がみられる。男女の差がある限り「同じこと」はできないのではないか。しかし、他の生物と比較するならば、狩猟採集民における男女の差異はきわめて小さい。それは個体としての男女が「家族」という別の社会単位に転換し、むき出しの男-性、女-性を喪失しているからである。ヒト以外の霊長類は、オスとメスという性の属性によって大きく分離された生き方をしている。メスとオスとの分離とその克服という要因によって社会の形態がおおきく左右される。人間はそういった性の生物学的なくびきから脱却し、男女においても「同じ」を実現した動物である。狩猟採集民社会における男女の平等性について実例をあげて論ずる。

■性的な社会決定論からの脱却は、霊長類社会の流れに属しながらも、独自の社会性を獲得したヒトの特徴である。男女を問わず、人間は「同じこと」をするように生きている。狩猟採集民社会はその原点であるといえよう。人間社会はその後さまざまな変貌を遂げるが、その原点はいずこにおいても生きているはずである。人間の表象能力の進化は「同じこと」の意味も変容させ、具体的な行動から幻想的対象へのコミットメントをその代用とすることも可能とした。しかし、そういったソフィステイクーションを受認しない「目には目を」の原則が根強く生きているのも人間の社会なのである。

集団形成と暴力：スールー海域世界の事例から 床呂郁哉（AA研）

■ 要旨：

集団研での討議を通じて「集団（カテゴリー）がまずアプリアリに存在するのではなく、むしろ行為を通じて集団（カテゴリー）が形成されてくる」というテーマが繰り返し言及されてきた。本稿ではとくに「暴力」行為に焦点化することを通じて暴力を通じた集団ないし集団カテゴリーの形成について論じることを試みる。この暴力と集団的秩序の生成に関しては今村仁司の社会哲学とくに第三項排除理論においても主題的に論じられ、そこでは「暴力は例外的な病理現象ではなく根源的な現象」であることが指摘されている。また近年の霊長類学・化石人類学、考古学等における暴力をめぐる新たな知見も本主題を検討する上で多くの示唆を与えうるものである。本稿ではこうした諸分野の先行研究の問題意識を共有しつつも、むしろ筆者のフィールドであるスールー海域世界におけるミクロな民族誌的次元での暴力を素材に暴力と集団（カテゴリー）の生成や産出（ポイエーシス）を検討するものである。とくに現地におけるいわゆる「海賊」行為（piracy）と「報復」（feud）という行為の事例を素材として、そうした暴力的実践と集団ないし集団カテゴリーがどのような相互関係を切り結んでいるかを分析し、行為の連鎖による集団性の産出という現象を解明する。

■ 構成（案）：

第一部：問題意識・・・なぜ「集団形成と暴力」か？

人類学・霊長類学・考古学等における暴力の研究

ホブズの人間観とルソー的人間観：狩猟仮説とその批判。Man the Hunter か Man the hunted か？

集団秩序と暴力：今村社会哲学における暴力と第三項排除理論。「戦争文化複合」論

第二部：民族誌的考察：スールーにおける暴力と集団形成

対象地域の概要：民族編成（タウスグ、サマ・デア、サマ・ディラウト）等

スールーにおける集団的暴力概要と社会的背景

スールーの海賊：エスノジェネシス：海賊を通じた民族カテゴリーの生成

現代の海賊のタクソノミー。海賊遠征の概要。海賊行為の事例。

海賊と民族集団カテゴリー。海賊実行集団の編成について。

スールーにおける報復：報復をめぐる文化的イデオロムと社会的実践。報復の事例。

報復を通じた「敵／味方」集団の生成と再編成

第三部：結論：暴力の遠心性と求心性。行為の連鎖を通じた集団（カテゴリー）の生成と産出

霊長類における父系社会の進化 中川尚史（京都大学）

ヴァン・シャイックの社会生態学モデル（van Schaik, 1989, 1996; Sterck et al., 1997）は、論理上の問題点や未検証な部分もあるものの、霊長類の社会進化をもたらす淘汰圧について最も示唆に富んだ影響力のあるモデルである。

このモデルに拠れば、食物の分布と捕食圧という生態学的要因が、雌の群居性をもたらし、さらに群れ雌が晒される採食競合の主たる型を決める。そしてその採食競合の型の違いから、霊長類の複雌群は順位序列、および分散の有無から次のような4つの社会カテゴリーに分類される。1) 雌分散・平等型、2) 雌居残り・平等型、3) 雌居残り・縁者びいき（・専制）型、4) 雌居残り・縁者びいき・許容型。またこのモデルは、雄の分布は雌の分布によって決まるという古典的な考え方を踏襲する一方で、雌が雄と群れを形成するのは雄に子殺しを防いでもらうためであり、複数の雌が同じ防衛雄を共有することにより、複雌群が成立したと考えた。

他方、このモデルが重視した以外にも、複雌群形成の淘汰圧としていくつかの要因が提案されている。1) 雌群居性をもたらす要因としての子殺し（Treves & Chapman, 1996）、2) 雌が雄と群れ形成する要因としてのセクシャル・ハラスメント（Fox, 2000）と 3) 捕食の危険（Hill & Lee, 1998）などである（以上、中川・岡本、2003 参照）。

また、ヴァン・シャイックのモデルは基本的には複雌群形成のモデルであるが、淘汰圧についてはそれ以外のいくつかの社会型についても概ね当てはまると考えてよい。単独生活者は、食物が分散し、かつ子殺しの危険が低く、捕食圧は高くとも隠蔽により捕食を回避するような小型霊長類で進化した社会型であり、単雄単雌群もやはり子殺しの危険が生み出したという具合である（van Schaik & Dunbar, 1990; van Schaik & Kappeler, 1997）。

ただし、同じ単雄単雌群であっても父親による育児が必要な小型種については、父親の育児を引き出すために進化したと考えられ、さらにこの型は複雄単雌群へと進化した。さらに、ヴァン・シャイックのモデルでは、雌分散を引き起こす淘汰圧については詳しく論じているが、父系複雌群形成の淘汰圧には言及していない点は注意しておく必要がある。雌分散・平等型の社会カテゴリーには、雌が分散するだけでなく雄も分散する双系型と雄が基本的には分散しない父系型が区別されていないのである。そしてこれまで父系型は、クモザル亜科とチンパンジー属という遠く離れた分類群でのみ見られることから独立に進化してきたとみなされてきた。

まず、クモザル亜科の父系社会の進化について考えてみる。ここで強調しておきたいのは、父系的色彩は新世界ザルの多くに共通してみられる特徴だという点である (Pope, 2000)。単雄単雌群を形成するヨザル属、ティティ属、サキ属は、当然雌雄とも分散するが、原猿亜目はじめ多くの哺乳類と異なり、どうやら雄のほうが近くに分散する。ヒゲサキ属、そしておそらくウアカリ属も、これら単雄単雌群が集まった群れを形成する。またマーモセット科で特異的に見られる複雄単(複)雌群でも同様であり、かつ息子がヘルパーとして、あるいは繁殖雄として群れに留まることにより形成される。さらに、ホエザル属の複雄群も、原則的には両性が分散するものの、息子がヘルパーとして留まり父親から群れが継承された例がアカホエザルで報告されている。母系型はオマキザル亜科に見られるのみなのである。こうした社会型を Purvis (1995)の系統樹にのせて考えてみると、オスのほうがメスよりも出自群の近くに分散する、いわば父系コミュニティを形成し、父親の育児の必要性から生じた単雄単雌群が祖型であることが分かる。またその祖型を持つサキ属、ティティ属、ヨザル属、マーモセット科は縄張り性を示すため、父系コミュニティは食物資源の一部を父系で継承する意味合いがあるように思われる。

次に類人猿。テナガザル科の単雄単雌群でも雄がより近くに分散するという報告もある (Pope, 2000)。また、シャーマンなど一部の種で、父性行動も報告されている。ここでやはり Purvis (1995)の系統樹に社会型をのせてみると、テナガザル科の単雄単雌群も新世界ザルの祖型と同様、父親育児の必要性が淘汰圧となって成立した単雄単雌群の系譜を引いている可能性も否定できないことに気が付く。さらに言えば、オランウータンを除く類人猿すべてに共通して認められる父系社会的特徴にも繋がっている可能性がある。

このようにいずれの分類群においても、その父系社会が父系的コミュニティにその源があることが推察されるが、そこから集団そのものが継承される父系社会が進化するためには、別の淘汰圧を考える必要があろう。現在、チンパンジーについては、微妙な違いはあれ、おおむね雄にとっての資源である発情雌を協同防衛すべく進化したとする説 (山極、1994; 杉山、2002; 古市、2002; Wrangham, 2000 など in 古市、2002) がある。また、いずれにも適用可能なものとして、雄が子殺しを協同して防ぐべく進化したとする説もある (van Schaik & Kappeler, 1997)。比較的大型で離合集散性を示す2分類群で父系社会が進化したのはとても偶然とは考えられない。ヴァン・シャイックの社会生態学モデルの考え方に立ち返り、発情雌や子持ち雌の空間的・時間的分布から予測される防衛形態を探ることが、いずれの分類群にも適用可能な仮説につながることであろう。

キーワード：父系社会、進化、淘汰圧、霊長類、人類

人間関係の場と構造 - 集団の成立について」船曳建夫（東京大学）

―― 語りつがれなければならないのはつねに それを強いた構造ではなく それが 強いられた構造である。しいられた果てを おのれにしてい行く さらに内側の構造である。（石原吉郎「構造」より）

人間は、近い人間との間に、関係を取ることが可能である。その関係が乗っているところを「場面」と呼び、その関係の可能性を保っている、無限の社会空間的な位置の広がり「場」と呼ぶ。

しかし、場の上で、人間は、横に並ぶ人間の、向こう側にいる人間と関係を持つには、位置を変えなければならない。そうやって、位置を変えることで持つ新しい関係は、その前の関係を、空間的には隠れたものに、時間的には前のものとして劣化させる。では、一度できた関係が、新しい関係によって、隠されず、過去に消えて行くものにならないようにするには、どうするか、どうしているか。それには、並んでいる人間とその向こうにいる人間とに、同時に関係することがなければならない、そのことが導かれる。それに従って考えれば、そのために、横にしか関係を持ってない場に、理論的な意味での「高さ」を持たせることが必要となることが分かる。すなわち、横に並んでいる人間を空間的に「越え」てその向こうにいる人間と結びつき、時間的に過去と未来に向かって「超え」て、現在に結びつけることである。その「高さ」を持つ「位置の積み重ね」を「構造」と呼ぶ。

さて、「高さ」を持つこととは何か。それは関係が一回性に留まらず、継続することである。それを保証している人間の行為が、ことばと「儀礼」である。ことばは身的な行為で、感情や情念や思惟といった心の働きを、抽象的に、線的に構成し、「儀礼」は、身的な行為で、同じ心の働きを、具象的に立体的に構成する。この二つは、対立しながら、どちらかが他を圧倒することなく、比喩的に言えば、休戦状態を闘っている。

*ここから先は、分かる時と分からない時とが交互にやってきていて、いまは、もっとよく分かってきた気がしているのですが、分かり切っていないので、「分からない時」にあたり、これ以上は、分かったようには、書けないのです。12月末にはその時分かった気がしていることを書きます。データとしては、バヌアツマレクラ島のフィールドワークから、人々の「対他関係」を、危機（毒殺、非難、地震、など）に対する時の行動、森の中での出会い、他の人を訪ねて行く時の「儀礼」などをエピソードとして取り上げます。

*困っている点は、「構造」を説明するのに、「高さ」を考えないとならないのですが、「高さ」からは、「ヒエラルキー」や、ある種の「イデオロギー」がミスリードされて出て来てしまうのをどう避ける

のか。それが出てこないとして、何を出してきたいのか、その姿を、まずは頭の中で明確に描けない段階にあることです。